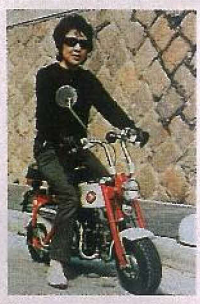
日出子さんは主婦であると同時に抽象的な風景画の画家でもある。

●アトリエは自室を改造。絵を描くこと以外に、ダイビング以外のスポーツは何でもやるといいいまだに好奇心を失っていない。

●古いアルバムから。左はダットサンで初めてのクルマ。右は3台目のフォード。手に持つ8ミリカメラなど、当時からいろいろやる人だったことを感じさせる。



●初めての自分のアシは、昭和43年に買ったモンキーだった。よく転倒したというが、リジッド・サスの2代目だからで、日出子さんが未熟だったわけではない。

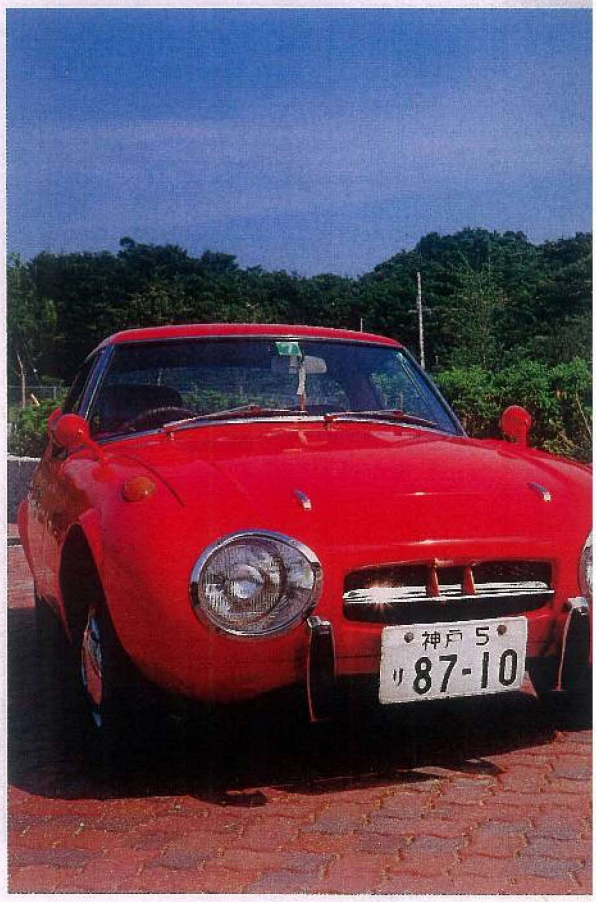
トランクはもらい事故の修理でアルミから鉄に交換したので開閉が重くなった。撮影中はプール帰りの子供などいろいろな人から声をかけられたが、日出子さんはにこやかに応対する。

甲山の人工スキー場まで出かけていってしまうのである。

これから先、ヨタハチ以外のクルマに乗り換えるとしたら。その質問に即答で「フィアット500なんかいいわね」と返ってきた。丸っこい形が好きだと言う。

なるほどね、と納得してしまう答えだが、クルマに詳しい人ならば、あるクルマを連想するだろう。そう、アバルトである。フィアットのボディがベースではない、ザガートなどの丸いボディを持つアバルトだ。フィアットの大衆車をチューンして（ヨタハチはそれほどではなかったが）、アルミを多用し徹底的に軽量化した空力的なモノコックボディの小型スポーツカー…大まかなところでは、ヨタハチと非常に共通性が多く感じられる。

聞けば、ヨタハチは当初フルアルミボディで計画されていたという。その計画はコスト面で没してしまったが（非公開ではあるが、数年前にトヨタがフルアルミのヨタハチを複製したという話もある）、目指すところのひとつにアバルトの存在があったことをうかがわせる。アバルトもまた純粋にスポーツカーを愛する一個人によってはじまったメーカーだ。

純粋に小型スポーツを目指したヨタハチだからこそ、特にこだわってはいないというものの、心の中に感じたままに風景をキャンバスに映す絵画を描く日出子さんは、これまで毎日愛用してきたのだろう。流れる水は腐らない、のたとえなのである。

●合計3131台生産されたが、レースやFISCOのレンタカーに使用され、実際の登録台数はそれを下回る。推定現存台数は約500台。